



貞好康志、『華人のインドネシア現代史
—— はるかな国民統合への道』木犀社、2016、
471p.

インドネシア華人に関する現代史研究に、つい
に待望のオーソドクスな研究書が出た。1960 年代
以降、実地調査に基づく研究が困難な時代が長ら
く続いたこの分野にあって、スハルト体制末期の
90 年代から逸早く高質の研究を世に送り出してき
た貞好康志による同書は、2011 年に上梓した博士
論文をもとにしつつも、原型をとどめないまでの
大幅な加筆修正を経て完成されたものである。こ
の重厚な本のテーマは、新生国家インドネシアの
国民統合の中で、華人がいかに位置づけられるべ
きかという課題をめぐる紆余曲折の過程について
である。

外来系の移民の子孫をいかに国民に組み入れる
かという問題は、その集団の存在がテクニカルに
対処し得ないほどのプレゼンスを占めている場合、
当の国民概念そのものにも問いを突きつけること
になる。そこではまず、これらの人々を、血統
上は「本来の」（土着系の）国民とは異なるが例外
的に法令により包摂されるべき存在と見なすのか
（血統主義）、それとも生まれながらにその地で暮
らしているのであれば正統な国民と見なすのか
（属地主義）、という国民を構想するうえで立脚す
べき基本的な方向性の分岐が横たわる。また、こ
の国民概念をめぐる問いと不可分なものとして、
彼らに国民として十全なメンバーシップを付与す
るにあたり、当人らの民族性（この場合「華人性」
）をどう位置づけるかも問題となる。さらに事
態を一層複雑にさせているのが、華人たち自身に
とっては副次的とされがちだが国民統合上は無視
できない課題、すなわち、植民地期以来の経済構
造を引きずった彼らの優越的地位をいかに「解決」
すべきかである。こうした問題系の全てが本書を
貫く重要なモチーフとなっており、それらをめぐ
る（主に華人側の）議論の過程、および実際の政
策運用の変遷とが、「はじめに」と「おわりに」で

挟まれた以下の構成に沿って時系列的に跡づけら
れていく。

- 序 インドネシアの国民統合と華人
- I 華人問題の原型 —— 植民地期
- II 「インドネシア志向」への試練
—— 激動期
- III 華人政策と矛盾の拡大
—— スハルト体制期
- IV 新たな「インドネシア民族」へ
—— 改革期

ナショナルな枠組みの妥当性

一瞥して明らかなように本書の論述は、植民地
期、独立期からスカルノ期（激動期）、スハルト体
制期、ポスト・スハルト期（改革期）という具合
に、インドネシア現代史の画期に沿って整理され
ている。この地における華人を取り巻く環境ない
し政策の変遷は、上述のナショナルな時代区分と
ほぼ一致して推移したため、本書が採ったこの構
成が妥当性を持っていることはまずもって論を俟
たない。各部の下はさらにそれぞれ 2～3 章ずつ
（全 10 章）に分けられており、それらはおおむね、
当該時期の政治・社会情勢およびそれらを背景に
導入された政策（群）をマクロに位置づけ分析し
た章（第 1, 3, 5, 6, 8, 10 章）と、同時期を代表す
る華人知識人たちの言動に焦点を当てた章（第 2,
4, 7, 9 章）とに分けられ、部内で両者が補完的に
配されている。評者はこのうち前者の各章の価値
を過小評価するものではない。たとえば、研究蓄
積の手薄な日本軍政期の華人史に紙幅を割いてい
る第 3 章、スハルトの華人政策が世評とは異なり
むしろ社会の側からの「反共産党・反華人」感情
に基づく先鋭な要求に対し受け身的に策定されたと
の重要な指摘を含む第 5 章、そして 2006 年の新
国籍法の正確な評価を試みる第 10 章など、かほど
に体系立って整理された論考は他にはなからう。
しかし本書の真骨頂は何と言っても、後者の知識
人たちの言動を扱った各章であろう。そこでは、
「インドネシアこそ、われわれの祖国だ」と唱えた
華人たちがなぜそのような主張を行ったのか、

その言動の背景、言動のもたらした影響とともに、その過程で見られた摩擦や葛藤も含めて詳述されていく (p.6)。

特に第2章「インドネシア華人民党 PTI とコー・クワット・ティオン」は、本書中で最も力がこもった章であるように思われる。1920 年代から 30 年代にかけて、当時社会的に優勢であった「人種原理」に基づく発想を否定し、やがて PTI を掲げ所に華人とプリブミとの連帯、インドネシア・ナショナリズムへの参入 (=「インドネシア路線」) を試みたコーらの主張を描き出した同章は、著者の存在を学界に知らしめることになったデビュー論文がもととなっている。丹念な資料の読み込みと関係者へのインタビューも踏まえたこの章 (およびその背景・前史にあたる第1章) を読むと、本書を貫く主要なモチーフとして先述した問題系をめぐって打ち出されることになる思想的立場のほとんどが、インドネシア・ナショナリズム形成にとって重要なこの時期にすでに出揃っていたことが分かる。実は、後続の華人知識人たちの言動を描き出した各章 (たとえば 1960 年代前半の同化論争を扱う第4章や、スハルト体制崩壊後の 2002 年に華人知識人を集め開催された「大討論」を扱う第9章) もまた、すでに単発論文として公刊され同分野では必読のものとなっただけで、それらが大幅な再整理を経てこうして時系列的に一書中に並べられたことで、この 20 世紀初頭の記述をベースとしつつ、その後のインドネシア現代史の中での大きな思想のせめぎ合いの系譜として、明確な流れが浮かび上がってくるのである。

かくして、著者がこれまで積み重ね個々に発表してきた研究成果はひとつの体系性をもって世に出された。その体系性を支えているのが、他ならぬ、副題に掲げられている「国民統合への道」という方向性の軸である。では、この言わばナショナルな枠組みを採用することがなぜ妥当なのか。それは著者が正しく指摘するように、インドネシアの地の華人にとって 19 世紀末から 20 世紀にかけては、自分たちをいずれの国民と認識し行動すべきかというナショナル・アイデンティティの問題が突きつけられた時代だったからである (p.4)。その彼らの大方にとっては、(1960 年前後をピー

クとする大陸への大量「帰国」を経た後は一層) 「父祖の故地」の国家たる中国に庇護を求めることが現実的でなくなり、インドネシアの地で生まれ暮らし死んでいくことがますます自明のこととなっていくのだが、それでもなお集団としての華人の存在や位置づけは「本来の」インドネシア国民との関係で問題とされ続けた。このように、20 世紀を通じ目まぐるしく政体・政権が変わる中で、そのたびごとにネイションなるものに翻弄され、またそれとどう向き合うかの自覚を迫られ続けてきたのがこの地の華人の姿なのであり、その振幅や彼らに課された圧力の点で言えば、世界の華僑華人社会の中でも際立っていると言えよう。となると、華僑華人研究一般でよく言われる「華僑から華人へ」といったテーゼを単に確認するのみでは到底不十分なのであり (pp.27-28)、よりインドネシアの文脈に即した視点がまず必要となる。そして繰り返し強調してもし過ぎでないのは、インドネシアの他のいかなる種族 (スク・バンサ) と比べても華人は、ネイションとしてのバンサ・インドネシアの一員たることへのオブセッションに囚われ続けた人たちであった、という点である。なればこそ、華人社会とインドネシア・ナショナリズムとの接点を模索し腐心した華人知識人たちの言動を中心に据え、到達点としてのネイションを基点にそれらを位置づけ直すことで、本書は複雑で錯綜した歴史過程を辿ったインドネシア華人というこの対象の現代史を、最も包括的な形で捉えることに成功しているのだ。

冒頭でも述べたように、そもそも華人の位置づけをめぐる問いはインドネシアの国民概念自体の問い直しに直結する性質のものであった。その意味では本書は、20 世紀とその前後数十年にわたるインドネシア・ナショナリズムの歴史を、そのメインプレーヤーではなかった存在に寄り添って描き直した「もうひとつのインドネシア現代史」として読むこともできるだろう。

ナショナルな枠組みの限界

一貫して手堅い論述が続く本書を細部にわたりあら捜しをすることは、評者の力量をはるかに超

えている。そこで以下では、著者に常々薫陶を受けていつつ同じインドネシア華人という対象を研究しながらも、人々の生活に密着した場からの観察に基づくという方法論的棲み分けを行ってきた評者の立場から、あえて本書が書き残した点を指摘して批評をしたい。

先ほど来述べているように、本書は「インドネシアこそ、われわれの祖国だ」と唱えた華人たちを中心に、インドネシア・ナショナリズムの立場からその思考の系譜を1世紀あまりにわたって跡づけたものである。ここで取り上げられている知識人らは、ニュアンスの違いを超えて乱暴に整理するならば、華人社会が何らかの様態のもとで国民共同体（ネイション）としてのパンサ・インドネシアに十全に受け入れられ、かつ華人社会の間でもそのような自覚が広まることを求めて、言動を繰り広げた人たちである。つまり、彼らはパンサ・インドネシアこそが彼ら自身を最終的に包摂すべき唯一の共同体と見定め、その実現を究極の目的・目標としていたということになろう。インドネシア・ナショナリズムの観点からすれば全くもって模範的とも言えるこの「インドネシア志向」の基本的立場の内実が、実は単色に塗り上げられるようなものでは決してなく、プロセスや強調点の違いをめぐる熾烈な論争を繰り広げるほどまでの幅があったことは、本書が見事に詳述している通りである。

しかしである。ネイションないしナショナリズムのみを準拠とする研究や史観がいささかアナクロ（あるいは「20世紀的」オーソドクス）だ、とするような批判自体にさほどの新鮮味が感じられなくなっている今日、我々はネイションを最終的な帰着点とはしないような「別様の共同性」のあり方についても、しっかりと目を向けなければならないように思う。

もっとも評者は「別様の共同性」と言うことで、「インドネシア志向」でないのならば「中国志向」（ないし「オランダ志向」）か、などといった短絡的な択一論を想起させようとしているのではない。その手の議論はつまるところ、個人はいずれかのネイションに帰属すべきという発想そのものを補強するに過ぎない。また、ひと頃もてはやされた

類の議論、すなわち、頻繁に移動を繰り返す人々の行動や意識の様態などを踏まえて提示されたディアスポラ論や多元的・重層的アイデンティティ論など（p.27）に拠って、ナショナルな枠組みを相対化しようとする試みも、部分的にしか成功しないように思われる。というのも、それらの議論では非常にしばしば、社会的な制約から遊離し状況に応じてフレキシブルに何某かを取捨選択できるような強靱で自由な主体をモデルに据えてしまっているからである。

共同体はすべからく想像されたものであると喝破したB. アンダーソンが、顔の見える関係のもとで営まれる共同性までもを「想像されたもの」と切り捨てたことは別所で批判的に指摘した通りであるが〔津田 2011: 36-38〕、私見では、ナショナリズム（に基づく枠組み）の超克は、グローバル化の波に乗って国家から離脱していこうとする一握りの特殊な人たちに焦点を当てることによってではなく、むしろごく普通の人々の日常生活の中に、すなわち、顔の見える関係性が実現する空間において紡ぎ出される共同性に目を向けることによってこそ、達成されるように思われる。しかるにこの点著者は、たとえば華人にとっての「素朴な愛郷心」が「中国を祖国と考えること」（＝愛国心）へと昇華することは「まず順当なことであった」（p.23）と述べ、この両者の間にある飛躍については（検討を要する重要な問題ではある、と後註内（p.356）で指摘するに留まり）以降不問に付すなど、20世紀を通じて人々の想像力が徐々にナショナルなものに侵食されていく過程をやや自然化（あるいは所与化）して捉えているきらいがある。言うまでもなく、「いま・ここ」で現実的に自らが関係を取り結んでいる場（英語で慣用句的に“feel at home”というときの“home”）と、ノスタルジーの対象として語られる「故地」やイデオロギー的に表象される「祖国」との間には、大きな断絶がある（後者はあらゆる意味で「素朴」なものではない）。本来的にヴァナキュラーな人々の「場」（ないし“home”）への思い（あるいは、個別具体的な実践に支えられた人と人とのつながりの感覚）を、境界によって区切られた特定の政治空間（およびその中に暮らす均質的なものとして

イメージされ、出自規範や帰属意識などを媒介することではじめて説明可能となるような人間集団)に対する意識へと収斂させ、その「想像された共同体」へのつながりをあたかも自然なことであると人々に自覚させていくことこそが、政治的啓蒙運動としてのナショナリズムに他ならないのだとしたら、本書で述べられている「属地主義」や「血統主義」はいずれも、人々を特定の共同体へと意識を向けさせ動員していくためのロジックに過ぎない、ということになる。

この観点からすれば、改革期に入った 2002 年に「国民統合と国家建設における華人の使命と責務」と題して開催された「大討論」(第 9 章)の登壇者のいずれもが、華人ひとりひとりがインドネシア国民の構成員であると自覚すること(評者なりの言い方をすれば、ナショナルな主体となること)の重要性を(時に苛立ちながら)いまだに強調しているのは、極めて示唆的である(pp. 288, 318, 321)。他方で、戦前に(東インドの自治を含む)インドネシア・ナショナリズムと連帯しようとしたコー・クワット・ティオンが、後半生には同化「主義者」や同化「論者」として政治の表舞台に立たなかったことは(p. 123)、華人知識人たちの人生の歩みの中にも(そして恐らくは当の彼らが盛んに何らかの主張を繰り広げていたそのさ中にあっても共時的に)、ナショナルな主体には還元され得ない生があったことを示しているようで、これまた注目に値すべきであるように思う。

もっとも著者自身は、ここで評者が「別様の共同性」として言及したのと通ずる議論を、本書には収録されなかった別稿[貞好 2000; 2003; 2004]

ですでに個別に展開している。また本書の「おわりに」の末尾でも、(土屋健治の「知識人論」を援用しながら)本書が知識人の言動に注目したことを擁護しつつも、他方で民衆の日常生活の中では多くの場合、華人／プリプミの別にかかわらず平和的な共存が実現しているという事実を強調している(pp. 352-353)。ナショナリズム・イデオロギーが吹き荒れた 20 世紀、インドネシアの華人がインドネシア・ナショナリズムといかに向き合ったかを描き出したこの金字塔の先に、どのような研究領域が残されているか。この新たに登場した必読文献(文字通りオーソドクスである)をもとに、考えてみてはどうだろう。

(津田浩司・東京大学大学院総合文化研究科)

引用文献

- 貞好康志. 2000. 「『民族性』と『在地性』——ジャワの鄭和祭にみる交錯『近所づきあいの風景——つながりを再考する』福井勝義(編), 91-116 ページ所収. 京都: 昭和堂.
- . 2003. 「インドネシア〈華人〉女性の個人史——マ・ニオからの考察(前篇)」『近代』91: 61-78.
- . 2004. 「インドネシア〈華人〉女性の個人史——マ・ニオからの考察(後篇)」『近代』93: 1-17.
- 津田浩司. 2011. 「『華人性』の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』京都: 世界思想社.